



Title	内村鑑三とトランスパーソナル心理学
Author(s)	細田, 信一
Citation	基督教学, 40, 22-24
Issue Date	2005-06-09
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46688">http://hdl.handle.net/2115/46688</a>
Type	article
File Information	40_22-24.pdf



[Instructions for use](#)

## 内村鑑三と トランスパーソナル心理学

細田 信一

内村鑑三とトランスパーソナル心理学と言う、一見全く何の関係も無いこの両者には実は切っても切り離し得ない深い関係が存在する事が分かったので、ここに発表する。

まずトランスパーソナル心理学とは何であろうか。それに答える前に心理学の発達の歴史から紐解かなければならない。西洋の心理学は、精神分析学・行動主義心理学・人間性心理学と言う三つの勢力が存在していた。まず精神分析学であるが、これは無意識の発見が大きな業績である。実は人間は意識するところを超えて無意識により現在の行動が規定されているのである。つまり無意識の欲求である。これが正常に満たされないと心理的に

は病的になり、時には身体疾患にまで及ぶ。これを発見したのが、近代精神療法の父と言われるS・フロイトである。次に行動主義心理学であるが、心理学が自然科学を背景としている以上、実証性を持たせなければならぬ。この実証性を持たず具体的方法は数学的に表現出来る事である。しかし心と言うものは非物質であるため、この実証性に乏しく本来なら自然科学の対象にはなり得ない。換言すれば或る数字に置き換えて表現出来ないのである。そこで人間行動を幾つかのパターンに分類するとか、人間と環境との相互作用を解析し、それを数字で表現すれば自然科学として成り立つわけである。これが心を欠いた心理学、つまり心理学でありながら心を扱わない行動主義心理学となったのである。これら二つの心理学の流れに対して、中でも精神分析学が人間の病的な面ばかりを見ていたのに対し、明るい面を見ようとして出現したのが、人間性心理学である。代表的学者はアブラハム・マズローで、彼は人間の欲求を「欠乏欲求」と「成長欲求」とに分け、基本的欲求である欠乏欲求が満たされると、人は成長欲求へ進む事が出来ると考えた。

しかしマズローはこの成長の最高段階に到達してもまだ不十分と考えて、この上の可能性に目を向けたのである。これがトランスパーソナル心理学で、邦訳名を「超個人心理学」と呼ぶ。個を超えるのである。従来の心理学は人間の個の範囲内だったが、この個を超えた宇宙的アイデンティティに進むのがトランスパーソナル心理学である。この宇宙的アイデンティティとは、自我の成長の最も高いレベルを超えて、自我の殻を破り宇宙意識に目覚める事である。人は宇宙意識と一体になると、「全ての二元論から開放」される。すなわちこの二元論とは主体と客体、自己と非自己、或いは善と悪等々の二元論である。さて、トランスパーソナル心理学の第一人者であるケン・ウィルバーは『意識のスペクトル論』の中で意識のレベルを次の様に表現している。極めて簡単に紹介すると、まず影のレベル。次が自我のレベル。それから実存のレベル。そして更にその次が超個の帯域となる。最後に心のレベルだが、このレベルに至って初めて人は宇宙と一体化する。すなわち人間は意識のレベルが深化するに従って段々と宇宙に近づき、最後に宇宙と一つになるのである。

る。これが意識のスペクトル論の（極端な）概略である。さて理論はともかくとして、現実到我々の人生そのもので得られるトランスパーソナル体験とはどんな体験であろうか。その体験とは「超越体験」と言って、砕いて言えば悟りの一種である。この体験者は変性意識状態を経験する。ではこの変性意識状態とはどんな状態であろうか。それには次上げる特徴が有る。①表現不能性。激烈と言うか、生涯忘れる事が出来ない様な体験。これは言葉による表現を不可能にするものである。②純粹知性的。次にこうした超越体験は意識が極めてはっきりして、非常に理性的になる。③変性した時間と空間の知覚。言わば一瞬に永遠を体験する事と解釈する事も出来る。④宇宙の全体的な統合。それと一であると言う感覚。この事の参考としてV・E・フランクルの言う存在 $\parallel$ 他在の概念が有る。⑤大宇宙が完全であると言う感覚。善も悪も無い、全てが肯定さる。これがトランスパーソナル体験である。しかし危険も有り、こうした体験は自己絶対化を起こす可能性が存在し、筆者はこれを「魔の帯域」と呼んでいる。しかしこの魔の帯域を克服すると、

眞の悟りになるのである。換言すれば悟りを捨てた処から、眞の悟りが得られる。ではこの体験を得るには如何にすべきであろうか。それは自我の計らいを捨てる事である。自我が宇宙意識との間の障壁となつて居るのである。自我は人格の成長途上では建築物の足場の様に絶対必要だが、建築物が完成すると足場は邪魔になると同じく、自我は宇宙意識へ到達する障害になるのである。

この自我の計らいを捨てるには、一、社会的挫折や不幸の経験が、全てでは無いが自我の計らいを捨てさせる機会になる場合。二、逆に最大限度努力して自己の能力を十二分に發揮した結果、これも全てではないが自我の計らいに対する未練が消失した場合の二点がある。何れにせよ一と二のどちらかを経験した場合に、或る人々は謙虚を獲得する。この謙虚の獲得が宇宙意識への目覚めの始まりなのである。つまり悟りである。しかしこの悟りの後に、あまりにも自己の経験が素晴らしいものだから、同様に全ての人ではないが、この経験に執着し自己を絶対化する危険が有る。これが魔の帯域である。

さて本題の内村鑑三はこの体験を基督の福音を通じて

得た。では彼の著書から引用しよう。それは『キリスト信徒のなぐさめ』第二章「国人に捨てられし時」からの引用である。「地に属するものが余の目より隠されし時、初めて天のものが見え始まりぬ。人生終局の目的とはいかに、罪人がその罪を洗い去るの道ありや、いかにして純情に達し得べきか、これらの問題は今は余の全心を奪い去れり。しかして目を挙げて天上を望めば、栄光の王は神の右に坐して、ソクラテス・パウロ・クロンウエルの輩、数知れぬほど、み位の周囲に坐するあり。(中略)その他あまたの英霊は今余の親友となり、詩人リヒテルと共に、天の使に導かれつつ、球より球まで、星より星まで、心霊界の広大を探り、この地に決して咲かざる花、この土(ど)にいまだ見ざる宝玉、聞かざる音楽、味わわざる美味：余は実に思わぬ国に入りぬ」。これがトランスパーソナル体験である。